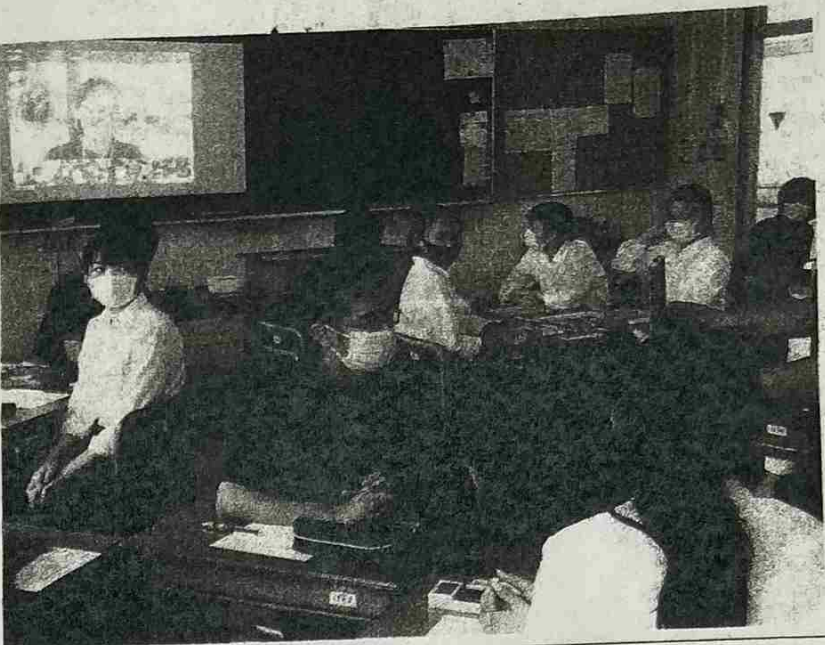


遠隔授業 接続先はボルネオ



ビデオ会議システムでボルネオ島とつなぎ、現地のNPOスタッフとやりとりをする生徒たち（奈良市で）

国際高生 現地の活動学ぶ

地球規模の課題を取り上げる国際高独自の授業「グローバル探究」の一環。1

年生168人は、ボルネオ島で食品や洗剤などに使われるパーム油の生産のために森林伐採が進み、貴重な野生生物がすみかを奪われ

県立国際高校（奈良市）で3日、北海道の旭山動物園と、東南アジアのボルネオ島をビデオ会議システム「Zoom」で結んだ遠隔授業が行われ、生徒たちが現地で野生動物の保護に取り組む人から話を聞いた。

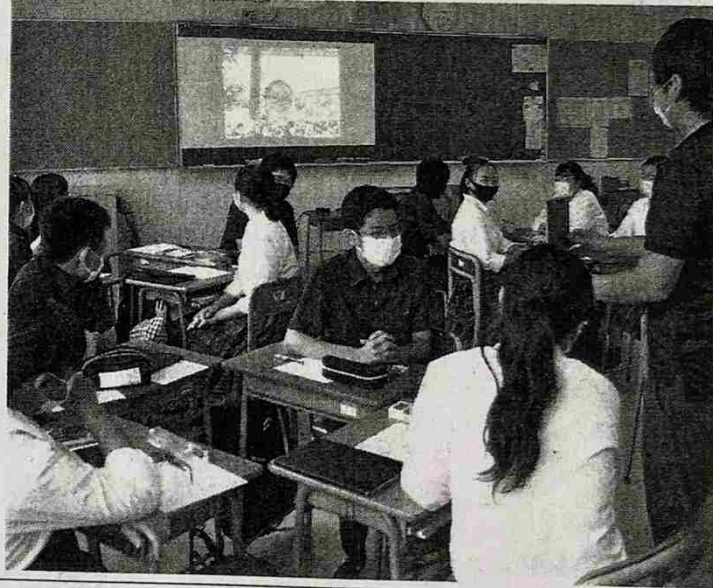
ている現状を事前に学んできた。

この日は、オンラインでつながった旭山動物園の坂東元園長や、NPO法人「ボルネオ保全トラスト・ジャパン」スタッフの岸優子さんらが、希少なボルネオゾウなどの保護に協力している活動を紹介。岸さんらは「大きなことでなくていい。周りにボルネオのことを伝えるなど、できることは無限にある」と生徒たちに呼びかけていた。

金田蒼馬さん(15)は「これまでボルネオの問題は知らなかったが、実際に活動する人の話を聞いて理解が深まった」と話した。

ボルネオ島と旭山動物園から 県立国際高校で遠隔授業

旭山動物園とボルネオ島にいる講師から、遠隔授業を受ける国際高校の生徒ら＝奈良市

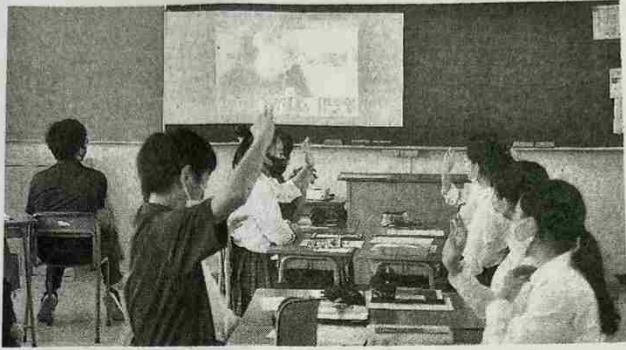


県立高校の再編により今春新設された国際高校（奈良市）の生徒らが、テレビ会議システムを使い、東南アジアのボルネオ島と旭山動物園（北海道旭川市）にいる講師から遠隔授業を受けた。

同校では、地球規模の課題に向き合いながら、持続可能な社会について考える「グローバル探求」の授業を取り入れている。この日は、ボルネオ島の野生動物の保護活動に取り組む同園の坂東元園長と、NPO法人「ボルネオ保全トラスト・ジャパン」の現地スタッフ、岸優子さんが講師を務め、1年生168人が授業に聞き入った。

坂東園長と岸さんは、保全活動や島の現状などについて説明。「今、自分たちができることは少ないと感じる」という生徒の意見に対し、2人は「何かしたいと思うことが一番大切。できることはたくさんある」と呼びかけた。授業を受けた金田蒼馬さん（15）は「募金活動など微力でもできることをして、未来をよくしたい」と話した。

SDGS授業 世界を身近に 国際高、ボルネオ島などつなぐ



テレビ電話でボルネオ島の動物保護施設とつないで授業を受ける県立国際高校の生徒ら＝奈良市

県立国際高校（奈良市二名町）で、生徒がインドネシアのボルネオ島などとテレビ電話をつなぎ、持続可能な開発目標（SDGS）について学ぶ授業があった。生徒らは、オランウータンなどが住む森の破壊と、自分たちの生活に密接な関係があることを学んだ。

同校は、世界の課題を考えるグローバル探究の科目がある。北海道の旭山動物園や、インドネシア・ボルネオ島でボルネオゾウなどの保護活動をする、認定N

PO法人ボルネオ保全トラスト・ジャパンの現地職員から、オランウータンやボルネオゾウなどの野生動物について説明を受けた。

ボルネオ島では、木材やパーム油を採るために森林破壊が進んでおり、日本でも多く消費されているという。生徒は4人組でグループを作り、自分たちでできることを話し合ったほか、動物園やNPO法人の職員らとディスカッションをした。

同校1年の古川崇人さん（15）は「遠い話だと思っていましたが、授業を受けて身近な問題に感じた。まず知って、何ができるか考えることが大事だと思った」と話した。

（渡辺元史）

世界の課題、自分の問題に

国際高校 ボルネオ島と遠隔授業

今年4月に開校した、奈良市二名町の県立国際高校（中尾雪路校長）は3日、北海道旭川市の旭山動物園と東南アジアのボルネオ島をテレビ会議アプリ「Zoom（ズーム）」でつなぎ、同島の森林保全活動についての遠隔授業を行った。

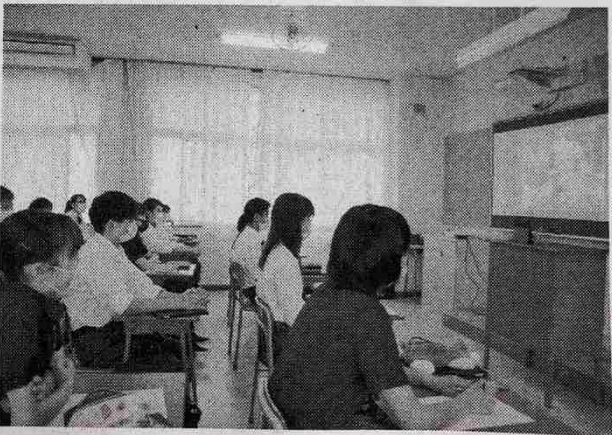
1年生の5クラス168人が受講。週2日、3時間行っている「グローバル探究」の授業で、日本でも消費されているパーム油が熱帯林の破壊に直結する事実を通し、世界の課題が自分

の生活につながっていることを学んできた。

遠隔授業ではボルネオオランウータンの飼育を通して同島の抱える問題に直面し、その支援にあたっている同動物園の坂東元園長と、ボルネオ保全トラスト・ジャパンの現地スタッフとしてゾウの保護などを行っている岸優子さんが取り組みを説明した。

その後、生徒は「ファミリー」と呼ばれる3〜5人のグループに分かれ、森林の保全活動についての思い

ボルネオ島から保護ゾウの報告を聞く生徒＝3日、奈良市二名町の県立国際高校



を話し合い考えをまとめた。今後の授業では、課題解決のために何ができるのか考えをさらに深めていく。

授業を受けた矢川敦士さ

ん（16）は最初は英語力を身に付けなければという意識が強かったが、探究心を持って国際問題に取り組んでいくことの大切さを認識した」と授業を通し思いを新たにしていた。

授業を担当した松本真紀教諭は「探究活動とはどういうものか実感し、世界の課題を自分の問題としてとらえられる人に育ってもらえたら」と話した。